



▲伊達武将隊・支倉常長さん
が、まち歩き案内の協力を
真撮影のモデルとして撮ら
参加者は納得の一枚を撮ら
と、何度も挑戦していま

若者世代に、さまざまな分野のまちづくりの取り組みを知ってもらうための体験企画「チャレンジ発見! みんなのせんだいめぐり2022」が、11月より、4回にわたり開催されました。この企画の実施は今年で2年目。都心創生や多文化共生など、各回ごとにテーマが設けられています。

12月3日には「地域のみんな」で育てるコミュニティとまちの未来」の回に参加した7人が、NPO法人まちづくりスポット仙台(以下、まちスポ仙台)の拠点がある泉区の商業施設「BRANCH 仙台WEST」を訪問。まちスポ仙台が、人々の集う場づくりや多様な主体の活動の後押しをしていくこと、その具体例として、キーワードを軸にした地域の活性化に取り組んでいることを学びました。また後半では、まちスポ仙台が運営に携わる「オーガニック」をキーワードにしたマーケットに参加者が自ら取材。

市政トピックス

まち歩きで楽しく学習! 体験型スマートフォン教室



▲参加者は、印象に残ったことや学んだことを共有しながら、交流を深めました

市政トピックス

ご遺族サポート窓口を開設しました

市は、12月1日より、ご家族が亡くなられた際の手続きの受け付けや案内をスムーズに行うため、ご遺族サポート窓口を、全ての区役所と総合支所に設置しました。これは、多岐にわたる手続きを整理し、書類の作成などをお手伝いすることでご遺族の負担を少しでも軽減しようと、令和3年12月より若林区役所にて試行していたものです。

サポート窓口は、亡くなられた方が住民登録されていた区の区役所・総合支所で利用が可能です。事前に申し込みされた内容を基に、必要な手続きや持ち物等をご遺族の方へあらかじめ連絡するため、スムーズに手続きを進めることができます。

市では、今後も市民の方に寄り添うサービスの実現を目指します。

ご遺族サポート窓口

●開設日時 平日午前8時半～午後5時 ●原則、電話またはホームページからの事前申し込みが必要 申・問 ご遺族サポート窓口

【青葉区】 ☎399・9801、【宮城総合支所】 ☎393・9840、【宮城野区】 ☎291・2167、【若林区】 ☎282・1487、【太白区】 ☎247・1374、【秋保総合支所】 ☎796・0551、【泉区】 ☎344・6561

市政トピックス

まちづくりを考えるきっかけに — みんなのせんだいめぐり

「出店者やお客さんとの話がうれしい」「興味を持って来てくれた人との話がしやすい場所。製品のことをより伝えられる」といった出店者の言葉から、まちスポ仙台の活動が、人と人をつなげる新たな場をつくり出していることを感じ取っていました。

取材後には「多くの人に知ってもらうにはどうしたらよいか」などの課題に、参加者同士で意見を交わす場面もありました。仙台の未来を担う若者が、まちづくりで一人一人にできることを考える貴重な機会となりました。

市政トピックス

S MMAの企画と展示が大集合・ミュージアムユニバース

S MMA(仙台・宮城ミュージアムアライアンス)では、17館が共同で、ミュージアムの魅力や楽しさを知ってもらうための企画に取り組みんでいます。その一環として、12月3日、せんだいメディアテークで「ミュージアムユニバース2022」すてき・ふしぎ・おもしろい」が開催されました。会場には、石器を使って革のプ

市政トピックス

知ることで垣根を越えるー心のバリアフリーを目指して

市は、障害への理解を深めるため、市内の小・中学生を対象に、障害のある方や、障害のある方を支える方との交流を行う「心のバリアフリー推進事業」を実施しています。11月29日には高砂小学校で、5年生61人と、右下肢が義足の市民ランナーである松本功さん、義肢装具士の宮内博之さんとの交



▲詩絵体験の様子。工作用紙や金銀の粉末絵の具などを使って絵を描きました

流会が行われました。講話では、松本さんが50歳の時にスポーツ義足と出会いマラソンを始めた経緯や「障害者をもっと身近に感じてほしい」という思いから、東京2020オリンピックの聖火ランナーに応募し、実際に走ったエピソード等を披露。「障害も個性の一つ。怖がらずに知ってほしい」とメッセージを送りました。また、宮内さんは、義肢装具士の仕事について「使う人に合わせたものを作ること、その人がやりたいことを実現するお手伝いをしていく」と説明し、児童たちは、二人の話を真剣なまなざしで聞いていました。

会場の体育館では、スポーツ義足に履き替えた松本さんと笑顔で一緒に走ったり、休憩時間も積極的に話したりするなど、交流を楽しみ児童たちの姿が見られました。交流会の最後には、児童から「眼鏡みたいに、義足も着けることが当たり前なのだと思う」という感想が聞かれました。



▲模擬義足を装着して歩く体験をする児童

3.11 震災文庫を 読む

刻印されたあの時 予言と記憶と エッセイスト 大島 真理

東日本大震災を語り継ぐため市民図書館に設けた「3・11震災文庫」。所蔵する約1万冊から、よりすぐりの本をご紹介します。



若松文太郎 / 著
アードサー / 英訳
ナード / 英訳
清流出版

「ひとのあかし」それは大地を耕し作物を育て、生き物を飼育すること、それらを奪われたひとは「あかし」を失ったのです。間に挟まれた写真も、如実にそれらを語ります。

詩人の言葉はとても平易でありながら計算し尽くされ、隠蔽されていた原子力関連の事故は、レポートのように淡々と事実を示します。



梶原さつき / 著
砂子屋書房

「来る。来る。来る、重き地鳴りにこみ上ぐる予感なりただ圧倒的な」誰かゝるないかあ叫びつつ駆ける廊下なりガラスを踏んで下駄箱越えて、教師である著者の3・11当日の姿、いや、あの体験をした全ての人の五感が再び揺さぶられるような、圧倒的言葉の群れです。そぎ落とされた言葉は、石礫のようにビシビシと、耐性のないあの時の記憶にあたるのです。

歌集はI「以前」、II「以後」に分かれ、「以前」にはそれなりの日常がリアリティーを持って歌われます。そして「以後」、世界が激変します。そこに読まれた人々、最悪な状況でも感謝し、時には卑屈ともとれる謙遜と甘受に胸を突かれます。東北人の心根や姿が結ばれています。

※リアス／樺を舞台にチェルノブイリ原発事故を描いた映画(地名は作品内の表記を使用) 紹介した本は、市民図書館でご覧いただけます 問市民図書館 ☎261・1585